

# 平成二十八年入学試験

## 試験問題

# 国語

### 注意

- 一、開始のチャイムが鳴るまで開いてはいけません。
- 二、受験番号を解答用紙の三方所に書き、答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 三、問題は **1** から **6** までで、八ページにわたって印刷してあります。  
なお、問題用紙のほかに別紙があり、表に別紙1、裏に別紙2が印刷されています。
- 四、終了のチャイムが鳴ったら、すぐに筆記用具を置きなさい。

セントヨゼフ女子学園高等学校

1

次の①～⑧の傍線部分について、漢字は読みをひらがなで書き、ひらがなは漢字に直しなさい。

- ① 一点差で惜敗する。
- ② 若手選手が台頭してくる。
- ③ 軽はずみな言動は慎む。
- ④ 分別のある大人になりましょう。
- ⑤ 問題の原因をぶんせきする。
- ⑥ じゅうなん体操をきちんと行う。
- ⑦ 軽い休憩をはさむ。
- ⑧ 友人をパーティーにまねく。

2

別紙1の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

問1

傍線部分①「ひとの気配」とありますが、それはどのようなことから感じられますか。本文中の言葉を使って、三十字以上四十字以内で具体的に書きなさい。(句読点も一字に教える)

問2

傍線部分②「植えこみ」とありますが、「植」を行書で書くと次のようになります。



○で囲んだ①・②には、楷書で書いたときとは異なる特徴がみられます。その組み合わせとして最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア ① 点画を省略している      ② 折れが丸みを帯びている
- イ ① 筆順が変化している      ② 折れが丸みを帯びている
- ウ ① 点画を省略している      ② 折れが角張っている
- エ ① 筆順が変化している      ② 折れが角張っている

問3 傍線部分③「気まずそうにジャージの裾を下ろす」とありますが、この時の清瀬の気持ちを本文中の言葉を使って、三十字以内で書きなさい。(句読点も一字に数える)

問4 文中の□に当てはまる言葉として、最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア ますます    イ すっかり    ウ もちろん    エ しきりに

問5 この文章の特徴について説明したものととして、最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 比喩を用いた文章であり、主人公の心情の変化をいきいきと描いている。  
イ 方言を用いた文章であり、人と人との関係の親密さを描いている。  
ウ 短い会話を重ねること、お互いの不信感が募る様子を描いている。  
エ 体言止めを多用することで、主人公の不安な気持ちを描いている。

3

別紙2の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

問1 傍線部分①「半分は間違っている」とありますが、なぜそう言えるのですか。二十五字以内で理由を答えなさい。

問2 傍線部分②「なされている」とありますが、この部分を単語に分けるとどうなりますか。最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア な——され——ている  
イ なさ——れ——て——いる  
ウ なされ——て——いる  
エ なされて——いる

問3 傍線部分③「絶滅」とありますが、この熟語と同じ組み立てのものはどれですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 豊富      イ 往復      ウ 音楽      エ 読書

問4 文中のAに当てはまる四字の熟語を、これより後の本文中から抜き出して書きなさい。

問5 文中のBに当てはまる言葉として、最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア たとえば      イ つまり      ウ しかし      エ なぜなら

問6 筆者の考えとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 日本人は伝統的に自然を崇拝してきたので、自然は保護すべきだという教育が徹底されている。  
イ 日本人に自然保護の考えが乏しかったのは、森林の豊かさを過信していたからである。  
ウ 日本人にとっての自然とは、支配し管理しなければならない対象であった。  
エ 日本人は一戸建ての家に対しての強いこだわりがあり、それが森林を絶滅させる第一の原因になった。

4

次の漢文を読んで、あとの各問いに答えなさい。

「※くわうかくろうニテ黄鶴楼三送ル孟浩然まうかうねんノ之ゆクラ広陵ニ」  
李白※

故人西ノカタ辞シ黄鶴楼ヲ

(1) 故人西のかた黄鶴楼を辞し

煙花三月揚州

(2) 煙花三月揚州※やうしうに下る

孤帆ノ遠影碧空ニ尽キ

(3) 孤帆ノの遠影碧空ハキんくうに尽キ

惟ダ見ル長江ノ天際ニ流ルルヲ

惟※ただ(4)見ル長江ノ天際ニ流ルるを※

注(※)

- 黄鶴楼 〓 長江のほとりにあつた高い建物。
- 孟浩然 〓 唐の時代の詩人。
- 李白 〓 唐の時代の詩人。
- 揚州 〓 長江下流の都市、広陵のこと。
- 惟 〓 「唯」と表記される場合もある。
- 天際 〓 空の果て。

(「唐詩選」より)

問1 漢文の詩の形式を次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 五言絶句    イ 五言律詩    ウ 七言絶句    エ 七言律詩

問2 傍線部分(1)「故人」とありますが、具体的には誰のことですか。漢字で書きなさい。

問3 傍線部分(2)「烟花三月揚州に下る」を参考にして、漢文(傍線部分)に返り点をつけなさい。

問4 傍線部分(3)の意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 遠ざかる一そのの帆かけ船の姿は、青空のかなたに消えてゆき、  
イ 他の船と別れを告げた一そのの帆かけ船の姿は、夕暮れの空に浮かび上がり、  
ウ 遠くからやってきた一そのの帆かけ船の姿は、青空のかなたに消えてゆき、  
エ 取り残された一そのの帆かけ船の姿は、夕暮れの空に浮かび上がり、

問5 傍線部分(4)の主語を書きなさい。

問6 「別れを告げる」の意味で用いられている漢字を、詩の中から一字で抜き出しなさい。

5

次の文章と資料を読んで、あとの各問いに答えなさい。

文化庁の「平成二十四年度国語に関する世論調査」の結果では、電子メールなど、パソコンや携帯電話を使ったコミュニケーションが広がる中、手紙やはがきを手書きする人が減っていることが裏付けられた。【資料1】によると、「はがきや手紙などの宛名」と「はがきや手紙などの本文」では、すべての年代を通して、「手書きする」の割合が六割弱から七割台半ばまでとなっている。「年賀状の宛名」では「手書きをする」の割合が（A）代（B）代で四割前後となっており、他の年代に比べて低い。

一方、【資料2】では、過去の調査結果と比較すると、「手紙は手書きで書くべきだ」という人が

【資料1】

【資料2】

問1 【資料1】を見て、(A) (B)に入る年代を数字でそれぞれ書きなさい。

問2 文章中の  部分には、どのような言葉が入りますか。最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 十六～十九歳では五十パーセントを下回って、前回より大幅に減っている
- イ 三十代以下では五十パーセントを超えて、前回より増えている
- ウ 四十代～五十代では五十パーセント程度で、前回よりわずかに増えている
- エ 六十歳以上では五十パーセントを超えているが、前回より減っている

問3 【資料2】の考察として適当なものを次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 「手書きが重要だ」という意識が各年代であいまいになってきている。
- イ 「手書きが重要だ」という意識は年代間の格差が小さくなってきている。
- ウ 「手書きが重要だ」という意識が若年層とそれより上の年齢層とで逆転している。
- エ 「手書きが重要だ」という意識は若年層ほど薄れてきている。



6

二〇一六年、五月に三重県伊勢志摩でサミット（主要国首脳会議）が開催されることになりましたが、サミットが地域にもたらす効果としてどのようなことが考えられますか。あとの「注意」にしたがって書きなさい。

〔注意〕

- ① 題名は書かずに本文から書き出しなさい。
- ② あなたの意見を、具体的に書きなさい。
- ③ あなたの考えや意見が的確に伝わるように書きなさい。
- ④ 原稿用紙の正しい使い方がい、全体を百六十字以上二百字以内にまとめなさい。

これで問題は終わりです。

別紙1 (本文は、設問の都合で省略した箇所があります。)

走はジョギングのルートをいくつか決めた。だいたいは、車通りが少なく、雑木林や畑が残る細い道だ。大会では景色を楽しみながら走ることはあまりないが、ふだんのジョギングや練習のときには、たまにぼんやりと周囲を見たりもする。

軒先に置かれた三輪車や、畑の片隅に転がった肥料の袋。そんなものを観察するのが、走は好きだった。雨の日には、三輪車は庇の下に入れられている。肥料の袋の中身が徐々に減り、やがて新しい袋に変わっている。

そういう、(1)ひとの気配の残滓(なごり)を発見するたびに、くすぐったいような気持ちになった。走が朝晩この道を走り、三輪車や肥料の袋を気にかけていることを、持ち主たちは知らない。知らずに、それを動かしたり使ったりして日々を過ごしている。そう考えると、走はなんだか愉快になってくる。箱のなかの平和な樂園を、そっと覗きこんでいるような気分になる。

腕時計を確認すると、六時半だった。そろそろアオタケに戻って朝食を食おう。

小さな公園の横を通り過ぎようとして、走は目の端に映ったものに気を引かれた。その場で足踏みしながら、首をのびして公園を見通す。公園のベンチに、清瀬が一人で座っていた。

地面に薄く散った砂を踏みしめ、走は公園に入った。清瀬はじつとうつぶいたままだ。走は少し離れた鉄棒のところで足を止め、清瀬の様子をうかがった。

清瀬は、Tシャツに着古した紺色のジャージのズボンという格好だ。ニラの散歩中らしく、ベンチには赤い引き綱が置いてある。清瀬はジャージの右裾をまくりあげ、ふくらはぎを揉んでいた。その膝から脛の上部にかけて、手術の痕らしき傷があるのを、走は見た。

清瀬はまだこちらに気づいていなかったが、(2)植えこみの合間で遊んでいたニラが、走の足もとに飛びだしてきた。(中略)ニラは濡れた鼻先で走のシューズを嗅ぎ、ようやく納得したのか、盛大に尾を振る。

走はかがみ、ニラの顔を両手で包みこむようにして撫でてやった。ニラは、知った顔に外で行きあったことに興奮を抑えられないらしく、干菓子が喉に張りついた老人のような、空咳に近い荒い息を口から漏らす。

その音でようやく、清瀬が顔を上げた。(3)気まずそうにジャージの裾を下ろす。走はわざと明るい調子で、「おはようございます」と声をかけ、清瀬の隣に腰を下ろした。

「ニラの散歩も、ハイジさんがやってるんですか」

「俺も毎日走るから、そのついでに。会ったのはじめてだな」

「飽きがくるんで、俺はちよつとずつルートを変えてますから」

走は自分が、相手との間合いを詰めようと狙っていることを感じていた。海中に超音波を投げかけて、その反射で魚影を探ろうとでもいうように。

「……走るの、健康のためですか？」

言うてから、走はひそかに舌打ちした。これでは、超音波を発す

るつもりがいきなり魚雷を投じたようなものだ。魚たちは驚いて深海に身をひそめてしまうかもしれない。秘密を腹にいっぱい抱えたまま、背びれを輝かせて深く潜っていつてしまう。あせりを覚え、走は一人であたふたとした。直接話法しかできない性格が、つくづくいやになった。

しかし清瀬は怒った様子もなく、ただ諦めに近い困惑の笑みを浮かべただけだった。自分には駆け引きも気の利いた誘導尋問もできないと悟った走は、黙って清瀬の出かたを待つ。清瀬はジャージのうえから、自身の右膝にそつと触れた。

「俺にとつて走ることは、健康のためでも趣味でもない」

清瀬ははっきりと言い切った。「たぶん、走にとつてもそうであるように」

走はうなずいた。ではなんなのか、と問われても困る。ただ、たとえばアルバイト先に提出する履歴書の趣味欄に、「ジョギング」と記入することは、どうしたってできないだろうと思うのだ。

「高校時代に故障してね」

清瀬は膝から手を離し、軽い口笛でニラを呼んだ。公園のなかを気ままに歩きまわっていたニラは、すぐに清瀬のそばにやってくる。清瀬は背をかがめて、ニラの赤い首輪に引き綱をつけた。

「でももう、ほとんど治った。いまは勘と速さが戻ってきているのがわかって、走るのが楽しいよ」

傷痕を見たときから、走にはなんとなくわかってきた。清瀬が走と同じように、真剣に走り追求してきた人間であること。はじめて会った夜に、あんなに必死に自転車で追いかけてきたのは、走の走りに興味が湧いたからであること。

引き綱をつけられたニラは、早く歩きたそうと、 清瀬を引っ張った。清瀬がそれを押しとどめつつ、「どうする、走ももう戻るか？」と聞く。走はベンチの背に身を預け、しばらく迷ったすえに口を開いた。

「竹青荘を紹介してくれたのは、俺も陸上をやってたってわかったからですか？」

「きみを追いかけたのは、きみの走りっぷりがすごくよかったからだ」

と、清瀬は言った。「でも、竹青荘にきみをつれてきたのは、とても自由に走っていると思ったからだよ。(中略)俺はそれがすごく気に入ったんだ」

「帰りましょうか」

走はベンチから立ちあがる。清瀬の答えは、走の心を傷つけなかった。

本格的に動きだした朝の空気が、ひとけのない公園にも押し寄せていた。表通りを走る車のクラクション。どこかの家で、新聞を取るためにポストを開閉する音。足早に職場や学校へ向かう人々の気配。

それらをまとめて肺に取りこめば、鮮度を増した血液が指先までまわっていく。

走は清瀬とともに公園から出ると、竹青荘へ向かって再び走りだした。(三浦しをん著 「風が強く吹いている」より)

わが国ほど豊かな自然に恵まれた国は少ない。しかも、四季のめぐりにしたがって、自然は変化に富んだ装いをみせる。欧米の家にバイブルがあるように、歳時記が多くの家にあるのは、驚くべきことだ。ウサギ小屋と椰揄やうされる小さな家にも庭があり、部屋には花が生けてある。日本人は世界の数ある民族の中でも、すぐれて自然を愛好する民族だと思っっている人が多い。しかし、これは半分は正しく、(1)半分は間違っっていると思う。子どもの教育や人間の健全な生活には、自然と親しむことが大変重要であるが、そのような教育が(2)なされているだろうか。残念ながら、非常に不十分と言わざるをえない。

知床半島の原生林の伐採が強行されて、シマフクロウが(3)絶滅の危機にさらされる。残された唯一のブナの原生林である白神山地の伐採計画が進められている。石垣島の白保の珊瑚礁が破壊されようとしているなど、大規模なAをあげればきりがない。国内だけでなく、熱帯雨林材の大量消費により、世界中から非難を浴びているのは周知のことである。すべて経済優先の考えに基づく暴挙であるが、もっと根本的には日本人の自然観に基づいている。

日本人は自然保護の思想が貧困だといわれる。なぜそうなのかを少し考えてみたい。一言にしていえば、日本の自然が豊かすぎるからである。国土面積の森林被覆率は七〇パーセント弱、これは森と湖の国フィンランドに匹敵する世界有数の森林国といえよう。木材の国カナダといえども森林被覆率は三三パーセント、ドイツやフランスで二七パーセントだから、日本は大変な森林国である。それに種類も多い。フィンランドへ行ってみると、樹種が非常に少ないことだ。カンバ類三種と松、トウヒくらい知っているのと、どこの森へ行っても間に合う。

わが国は、世界でも有数の天災多発国だ。毎年台風が襲来して草木をなぎ倒し、そこで洪水が起こる。地震や火山の噴火で山は崩れ、山火事で全山が燃えつきることもある。しかし、しばらくするとススキや笹が生え、ついで低木や松の緑が破壊された地肌を覆ってしまう。日本の森は、壊れても焼かれても復元する強靱さをもっており、世界中でも最も回復力が強い森だといってよい。

清い水と豊かな緑に覆われた自然の中で育った日本人には、それを保護しようなどという考えが生まれようもなかった。どんな災厄からも立ち直る不死鳥のような自然、それはちっぽけな人間の力をはるかに超越した不動の存在で、人間を守りこそすれ、人間に守られるものではありえなかった。

大野晋氏によると、大和言葉には、「自然」に該当する言葉は見当たらないという。現在われわれが使っている自然という言葉は、ネイチャーの訳語である。\* 親鸞の 末燈抄に「自然じねんといふは、もとよりしからしむといふことばなり」とあるように、自ずから然り、B、あるがままにあるものとして自然は認識されてきた。人々

は自然との一体感の中で、四時のうつろいに身をゆだね、ものあわれを感じとり、いのちのはかなさに思いをいたした。

ヨーロッパの森は日本のそれとは違い、人為に対してもろくて弱い。農耕牧畜が始まって以来、ヨーロッパの森林は破壊し続けられ、ほとんどなくなってしまった。自然は人間の対立物としてとらえられ、人間によって支配されるべき対象であった。自然破壊の極致に至ったとき、自然は管理し保護しなければならぬという思想が生まれる。プロシヤで自然保護という言葉が誕生するのは、わずかに二〇〇年前のことである。

日本人にとっては、自然は人間の対立物でもなく、ましてや支配する対象でもなかった。空気や水と同じく、人間をとりまくごくあたりまえのものであった。人間の力ではびくともしない豊かな自然、それが二二〇年の間に巨大な破壊技術の進歩によって、急激に壊されはじめたのである。しかし、まだ日本人の心の奥には、自然は無限に豊かで、不落の城であるかのような印象が根を張っている。この状況が続けば、かつてのヨーロッパがそうであったように、否もつと恐ろしい形で日本の自然が破壊しつくされるであろう。そうなればもはや取り返しがつかなくなる。今のうちに自然保護と愛好の思想を育てなければならない。

注(※) 親鸞…人名。

末燈抄…書名。

(河合雅雄著 「子どもと自然」より)



